

# 幼児の歌唱指導

—— 導入時におけるつまずきとその治療 ——

Teaching Songs to Infants

—— Their Failure as Beginners and its Remedy ——

武 田 道 子

Michiko TAKEDA

(昭和54年10月11日受理)

## I 研究の目的

幼児の歌唱指導は、聴唱法によってなされる為に、その導入段階の指導のあり方は、幼児に対して後々までも影響を与えていく。つまり、歌を覚える手段が、楽譜を媒介としてではなく、範唱を聴きながらの模唱であるため、その曲の持っている音楽的な味わいはもちろんのこと、リズムや旋律などの音楽的要素面、また発音、発声などの表現技能面のすべてが、耳に訴えた感覚的な指導でなければならない。

他面、その指導の展開は、発達に即して“遊びに仕組んだ形、にくふうされることが不可欠である。

“ぼく・わたし おうた 大好き!!、……この子どもの心からの叫びこそが、教師の唯一の願いである。

この論文は、このために書かれた。中心の論点は、「導入時の指導～そのつまずきと対策」ということになる。

すなわち、導入時のつまずきが、子どもたちにどのような影響を与えるものか、どんな事が歌唱指導上決定的なつまずきの要因となっているのか、実際の現場からの調査の結果を考察し、又、その治療方法はどうかあったら良いのかを明らかにするのが本研究の目的である。

## II 序 説

### 1 歌唱指導のねらい

〔態度面〕

\* 心を解放して喜こんで歌う意欲を育てる。

〔表現技能面〕

\* どならないで、のびのびとした声で歌わせる。(発声)

\* 口を良く開いて、ことばをはっきりと歌わせる。(発音)

\* 音程やリズムを正しく歌わせる。

大きく、以上のような柱をたてることができよう。加えて、以上の目標内容の指導を通して、音楽的諸感覚(拍子感・リズム感・フレーズ感・旋律感・強弱感・速度感・調性感・和声感・形式感・曲の山・曲想……)を育成するねらいもおさえておく必要がある。

## 2 歌唱表現能力の発達

〔声域の発達〕<sup>(1)</sup>

○……レベツとパウゼン

●……ジャーシルドとビーンストック

⊗……飯田秀一

## 〔表現能力の発達〕

## —1.3才～2才—

- 片言、口真似で、ごく簡単なひとふしを歌う意欲がみられる。

## —2才～3才—

- 音程は不安定である。
- 歌いながら、リズムに合わせて動くことを好む。

## —3才～4才—

- 聴覚の発達がいちじるしい。
- ひとりで、また友だちとも一緒に、いろいろな歌を歌うことを楽しめる。

## —4才～5才—

- メロディとしてのまとまりを感じとって歌うことができる。
- 友だちと一緒にそろっていろいろな歌あそびができる。
- 自然な発声に気づいて歌うことができるようになる。
- はっきりとした言葉で歌うことができるようになる。

## —5才～6才—

- 歌うメロディに構成力がみられるようになる。
- リズムや音程に気をつけて歌えるようになってくる。

## —6才～

- 歌うメロディに調性感がみられるようになってくる。
- リズムや音程を、さらに正しく歌えるようになってくる。

以上の表現能力の発達から、次のような音楽的諸感覚の育成を考慮することができる。

- \* 2才頃から、歌いながらのリズム表現を好むという発達段階から、この年齢あたりから、拍子感・リズム感・速度感の育成が可能であるだろう。
- \* 3才頃から、聴覚がとみに発達するというに伴って、強弱感・伴奏や間奏の美しさの味わい・曲の山の歌い方などの扱いが可能であるだろう。
- \* 4才頃から、歌うなかにメロディとしてのまとまりがみられるという能力の発達に伴って、フレーズ感・旋律感・歌詞の内容の理解などといった指導が可能であるだろう。
- \* 5才頃から、歌うなかにメロディとしての構成力がみられるということに伴って、形式感の把握も指導内容に盛り込めるであろう。
- \* 6才以後から、歌うなかに調性感の把握が認められるということに伴って、長調・短調・陽旋法・陰旋法など、いろいろな調の歌の経験をさせることが望ましいであろう。

### 3 教材選択の観点

#### 〔題材の側面から〕

幼児の身近な生活に直結したもの

- 行事の歌（定例・適時・毎日）      ● 生活の歌      ● 自然の歌      ● 動物の歌
- 乗物の歌      ● 花の歌      ● お話の歌      ● 遊びの歌      ● 音楽あそびの歌
- その他の歌

#### 〔歌詞の側面から〕

- 口語体でわかりやすい言葉のもの
- 生活経験に密着した身のまわりの内容のもの
- 擬音、擬声、擬態、かけ声、よび声などがよろこばれ、感覚的に受け入れやすいもの

#### 〔拍子の側面から〕

幼児の歌唱教材をみわたしてみると、そのほとんどが4分の2拍子、ついで4分の4拍子、ぐっと少なくなって4分の3拍子と8分の6拍子という具合である。

日本の子どもたちが、生まれてすぐに耳にする子守唄や、「いない いない ばあ」などのふしことばによる呼びかけは、4分の2拍子、4分の4拍子なのである。その意味からすれば、4分の2拍子、4分の4拍子の方が、素直に受け入れやすいということができよう。

4分の2拍子、4分の4拍子を中心に考えながら、4分の3拍子、8分の6拍子のものも扱うということに落ち着くだろう。

#### 〔リズムの側面から〕

- リズミカルで身体のもの。また、年少時では、1音節1音符のリズムのものが望ましい。

#### 〔旋律・曲想の側面から〕

- 元気な曲      ● 楽しい曲      ● 静かな曲      ● やさしい曲      ● おもしろい曲
- おどりたくなるような曲      ● きれいで美しい曲

いろいろな雰囲気のものを味わわせることが望ましい。

#### 〔調の側面から〕

調の側面からも、現代の歌唱教材を分析してみると大半は長調の曲、ついでわらべ歌、そしてごく少なくなって短調と陰旋法の曲という結果がみられる。

この面でも、長調・わらべ歌（陽旋法）を中心に、短調・陰旋法の曲も味わわせるということが言えよう。

#### 〔音域の側面から〕

「歌唱表現能力の発達」〔声域〕の項の年令発達に見合ったものが望ましい。しかし、例えば3才頃になると、みんなと一緒に楽しんでいろいろな歌を歌うように、果して、C<sup>♯</sup>～A<sup>♯</sup>内の曲となると該当するのは、わらべ歌あたりということになり、それだけでは現代の子どもたちは満足しないであろう。ひとりひとりの子どもの実態を充分把握した上で、たとえ正しい音程が得られずとも、教師の指導のねらいが、子どもの興味につながれば、極端な音域の曲でなければ、いろいろな曲を与えたほうが良いと考える。

### III 導入時のつまずきとその要因

つぎのような項目で、現場教師の実態指導についてアンケート調査を実施した。

☆ 新曲を子どもに与える時によく使う指導方法

☆ 歌唱指導の導入過程でつまづいてしまった事例

以上の2項目について、それぞれ、0～2才児担当、3才児担当、4才児担当、5才児担当の各年令毎にデータを集め、それを整理した。

すなわち、次のようである。

1 新曲を子どもに与える時によく使う指導方法

ア、歌詞の内容を簡単にお話にして、子どもに話してから導入する。

イ、教師が一通り歌ってから、次に区切って子どもと交互に歌っていく。

ウ、できるだけ身体表現をつけるようにくふうして歌に導入していく。

エ、自由遊び、食事、午睡前、その他の時間を利用して、あらかじめ何回も歌ってあげたり、伴奏を聞かせたりしてなじませておく。

オ、歌詞の内容、または曲の特徴的な箇所をとり出して遊んでから、自然に導入する。

カ、子どもと一緒に何回もくりかえして歌っているうちに、覚えさせてしまう。

キ、絵本やペープサート、あるいは実物を見せたりして、自然のうちに歌に誘いこむ。

ク、子どもの覚えやすそうなところから、教師と一緒に歌っていく。

ケ、季節に合ったもの、その折々の子どもの生活に結びつけて題材を選択し覚えさせる。

コ、何回も聞かせておき、子どもが「歌いたい、と言いついたらみんなで覚える。

サ、テープやレコードなどを使用して覚えさせる。

シ、黒板に歌詞を書いて、読ませながら歌っていく。

ス、「先生が、大好きな歌だから覚えてね、とって歌わせる。

セ、オルガン・ピアノで1・2回弾き、メロディになじませてから歌って聞かせる。

以上が、導入時の方法として挙げられたが、その回答のしかたは、およそ次のようである。

\* 1人1方法を回答した場合

\* 1人数方法を回答した場合

\* 「同一曲において、数方法を併用」のように回答した場合

この場合、後二者については、該当項目の一つ一つにばらした形で集計した。従って、回答数は、調査人数(105名)より上回っている。次の表のパーセンテージは、各年令毎に、回答数を回答総数で割った割合である。

年令	項目														回答総数
	ア (%)	イ (%)	ウ (%)	エ (%)	オ (%)	カ (%)	キ (%)	ク (%)	ケ (%)	コ (%)	サ (%)	シ (%)	ス (%)	セ (%)	
0～2才	10	9	24	12	10	1	6	2	0	2	6	0	2	6	47
3才	31	10	7	10	0	13	3	3	10	3	7	0	0	3	30
4才	22	25	6	18	6	4	6	2	2	0	4	4	0	0	46
5才	18	34	3	15	5	3	0	0	3	5	7	7	0	0	39

## 2 歌唱指導の導入過程でつまずいてしまった事例

- ア、子どもが疲れていたり、集中できない時に、無理に歌わせようとしたため失敗した。
- イ、“元気に歌いましょう、と声がけしたら、どなり声になりなかなかおらなかった。
- ウ、題材がむずかしく、又幼児の身近な生活とかけ離れていたため、興味を示さなかった。
- エ、教師がしっかりと歌を覚えていなかったため、子どもまでつまずいてしまった。
- オ、詞の内容が理解できずに、歌う歌詞に間違いが多かった。
- カ、絵本やペープサートなど資料の準備不足で、いきなり歌に入ったためつまずきをおこした。
- キ、曲が長すぎたので、なかなか覚えられなかった。
- ク、教師の範唱時の発音の不明確さが、子どもにつたわりなおすのに苦労した。
- ケ、行事に間に合わせたいというあせりから、とにかく覚えさせようとおしつけたために失敗した。
- コ、季節はずれの歌など、教師の選曲がまずく、子どもが興味を示さなかった。
- サ、指導案通りに行なおうとしたため、子どもがついてこれなかった。
- シ、ひき歌いが不十分でうまくいかなかった。
- ス、範唱～模唱の際のフレーズの区切りが悪く、子どもたちがのってこれなかった。
- セ、“さあ、歌いましょう、とかまえてしまって、単に、歌詞とメロディだけを覚えさせようとしたため、子どもがついてこなかった。
- ソ、伴奏がつかえてしまったので、子どもまでとまどってしまった。
- タ、教師だけは知っているのでどンドン歌ってしまったため、ついてこなかった。
- チ、最初から楽器を持たせたため、騒然となってしまった。
- ツ、休符のとり方の指導がうまくいかず、なかなか歌が覚えられなかった。
- テ、テンポがたいへんゆっくりの曲だったので、のりにくかった。(5才児)
- ト、特定の子だけに目がいってしまって、全員の子どもたちの目を見てあげなかったため、気持がこもらなかった。
- ナ、テンポがはやすぎた曲だったので、子どもがついていけなかった。(0～2才児)
- ニ、身体表現をくふうして与えなかったため、余りのらなかった。
- ヌ、黒板に歌詞を書いてやったら、歌詞を読むことだけに夢中になり失敗した。
- ネ、身体表現する事だけを指導したら、歌が後まわしになり覚えられなかった。
- ノ、強弱などおかまいなしに歌の指導をしたため、どんな歌でも大声になってしまった。
- ハ、音域が高すぎたため、子どもたちの意欲を半減させてしまった。

## IV 結果に対する考察

### 1 導入方法に関して

この結果については、年令毎の特色のみられる方法と、年令に関係なく行なわれている方法とに大別できそうだ。

#### [年令毎の特色のみられる方法]

☆ “歌詞の内容を簡単なお話にして、子どもに話してから導入する。”について。(項目ア)

0～2才児では、言語との発達の関係もあろう。この方法は10%となっている。また、お

話をじっくり聞いて、子どもなりの想像性を働かせるに至れないということもある。しかし、3才児では、4才児、5才児よりも、また、他の導入方法よりも、この歌詞に対する話し合いが高いパーセンテージを示している。3才児の“これなあに、”“どうして、”の発問を連発する時期・発達に見合った方法とも言えよう。言語の発達ともあいまって、人の話しを充分理解できるようになり、また、身のまわりのものすべてが興味・模倣の対象ともなり、音楽的にも、いろいろな題材の歌を好むという段階にいるからとも言え、導入方法として適切であると思われる。

4才児も、3才児と変わらず、アの項目の方法が多く用いられている。しかし、イの項目のフレーズ毎の範唱～模唱の方法が、それを上まわって行なわれ、3才児との違いを示している。

5才児になると、歌詞の話し合いという導入方法は、18%と落ちこんでいる。これは、むずかしい歌詞は除いて、大ていの事柄が理解できてきているからという理由によるものであろう。その代わりに方法として、歌詞を板書して、読ませながら歌っていくという方法（項目シ）に代わっている。それは、4才児も同様に、5才児よりはパーセンテージは低いが、歌詞の板書をすでにとり入れているという結果がでている。しかし、これは一般的・妥当の方法とは言い難い。

☆ “教師が一通り歌ってから、フレーズ毎に区切って子どもと交互に歌っていく。”について。（項目イ）

0～2才児9%，3才児10%，4才児25%，5才児34%と年令順に多くなっている。この結果から見ると、3才児は、模倣遊びが得意となるが、極めて反射的・直観的であるのに対し、4才児になると、フレーズ感が芽ばえ、フレーズのまとまりがとらえ易くなってくる。また、5才児にあっても、旋律の記憶力の増長と関連し、当然、予想される結果と考えられる。

☆ “できるだけ身体表現をくふうして導入する。”について。（項目ウ）

0～2才児が、1番高い結果となった。それに反して、3・4・5才児は、低いパーセンテージで並んでいる。これについては、予想外であった。この場合は、たんなるゼスチャアの域を出ないものようであるが、さらにより高い次元で考えていかなければならない問題を含んでいる。V、つまずきの治療の項で、この問題に触れることにする。

☆ “子どもと一緒に何回もくり返して歌っていくうちに覚えさせてしまう。”について。（項目カ）

3才児が、他の年令に比して高い結果となっている。0～2才児は、片言で、特徴的な言葉を実似しながら歌う程度であるので、前項ウの身体表現でという方法が多くとり入れられているのであろう。

しかし、3才児になると沢山の歌が歌えるようになり、反射的・直観的まねっこ上手の3才児にとって、この何回ものくり返しによる教育効果は大きいものと思われる。

〔年令に関係なく使用されている方法〕

☆ “自由遊び、食事、午睡前などの時、あらかじめ何回も歌ってあげたり、伴奏を聞かせたりしてなじませておく。”について。（項目エ）

このような場での指導の効果は大きい。教師のピアノ、またはオルガンのまわりに集まってくれば、もうしめたものである。その結果として、“何回も聞かせて、子どもが歌いたいと

言いだしたらみんなで覚える。 (項目コ) という方法が出てくるのであろう。題材への好みははっきりしてくる5才児が、その意志表示をはっきりと示している。

また、項目サの「テープやレコードなどを使用して覚えさせる。」という方法も、エの項目と同じような場での活用と理解して良いであろう。エの項目と同様に、年齢毎の特徴はない。

☆ 「絵本やペープサート、実物など見せたりして、自然のうちに歌に誘いこむ。」について (項目キ)

5才児については、アの項目でも考察したように、その題材の理解について、教師が余り神経を使っていないようである。

また、0～2才児、4才児に比して、3才児の結果が落ちこんでいる。これは、「季節に合ったもの、その折々の子どもの生活に結びつけて、題材を選択していく。」というケの項目との関連において、理解が可能のようである。すなわち、0～2才児、4才児は、教師の側から教材選択 (項目キ) がなされ、3才児では、子どもの側から教材選択 (項目ケ) をということが考えられる。「先生の大好きな歌だから覚えて」といったスの項目が、0～2才児にあらわれていることも、これに準じて考えられる。

☆ 「歌詞の内容、または曲の特徴的な箇所をとり出して遊んでから、自然に導入する。」について。 (項目オ)

0～2才児は、その曲の特徴的なところを、片言、口真似で遊ばせるという方法で10%であるのに比して、3才児がゼロとなっているところが特徴的である。

このことは、3才児では、「歌詞の内容を簡単なお話にして、子どもに話しかけてから導入する。」 (項目ア) の導入方法が、トップに挙げられたことに関連して考えることができよう。つまり、お話しをする段階の中に、歌詞の内容、又は曲の特徴的なところをとり出して遊ぶということが含まれると解釈できるからである。

## 2. つまずきの要因に関して

このつまずきの事例については、かなりの回答が寄せられ、一応回答数の多い項目毎に、前述 (III-2) のようにまとめた。この結果、一番多いつまずきの原因は、子どもの気分がのらなかったり、疲労している時に、無理に歌わせようとした時が、トップに挙げられてきている。この事は、たんに音楽リズムだけの問題ではないであろう。

さて、つまずきの要因をまとめてみると、おおよそ次のようになる。

### ☆ 教師の指導力の問題

- \* 教材研究不足 (曲の解釈、暗唱など)
- \* ひき歌い、伴奏の練習不足
- \* 範唱～模唱時の適切な指示不足
- \* 提示物などの資料不足
- \* おしつけ的指導

### ☆ 音楽的内容にかかわる指導の問題

- \* 発声指導の問題
- \* 発音指導の問題
- \* 強弱のとらえさせ方の問題
- \* フレーズのとらえさせ方の問題
- \* 休符のとらえさせ方の問題

- \* 身体表現への結び方の問題
- \* 題材選択の問題（歌詞の内容、テンポ、音域など）

## V つまずきの治療

ここでは、まず現場教師による導入過程のくふうへの観点の例を整理・紹介し、次に、この関連のもとに筆者による「つまずきの治療」を「つまずきの要因」(IV-2)に照らして、明らかにすることとしたい。

### 1. 現場における好ましい治療への手だて（例）

ア. 身体表現をくふうしてとり入れた時。

（たまごのうた、おばけのうた、大きな古時計、てんぐの鼻など）

イ. 子どもの身近かにあるものをとり入れて導入した時。

（水あそび、アイスクリームの歌、こいのぼり、でんでん虫、ひらひらちょうちなど）

ウ. 歌詞の内容に合った絵やお話を作ったり、そのものになって遊ばせてから導入した時。

エ. 動物に対してたいへん興味を持っている年令だったので、その好みに合わせたら。（特に、0～2才児）

オ. 教材が、子どもの興味（のり物）にぴったり合っていたため。（特に4・5才児）

（お舟はぎっちらこ、汽車ぼっぼ 僕らの宇宙旅行など）

カ. 短かい歌で、かわいい歌をゆっくりとていねいに歌ってあげた時。（0～2才児）

キ. 子どもひとりひとりの目を見ながら、歌いかけてあげた時。

ク. 他の領域（絵画製作など）との続きとして扱った時。

ケ. 強弱のはっきりした曲を、おもしろく扱ったら。

コ. 教師が、心から楽しんで歌ってあげたら。

サ. 歌詞がたいへんおもしろい題材だったので。

（あぶらむし、カメンライダー、ウルトラマンなど）

シ. 遊びの発展として、自由な雰囲気の中で扱ったので。

ス. 新曲を扱う数日前から、機会をとらえて聞かせておいたので。

セ. ピアノの伴奏を正しくきれいにひいてあげたら。

ソ. 問答唱の題材を遊びにしくんで扱ったら。

（森のくまさん、山びごっこなど）

タ. 休符のところに、手拍子や身振りを入れながら歌ってあげたら、すぐ真似してきた。

チ. いろいろな曲を聞かせたなかから、子どもが歌いたいと言った曲を扱ったら。

ツ. 高い音域の歌を歌いやすいように移調して扱ったら。

テ. 歌う順番を決めたら、競争心のようなものが盛り上って歌うようになった。

### 2. つまずきの治療

☆ 「教師の指導力の問題」への治療

まず、教材研究不足があげられている。明確なねらいをどこに置くか、I序説で述べたような観点でのねらいのおさえがしっかりしていれば、つまずきは起らないであろう。その余裕からは、おしつけの指導は生まれてこないと確信する。つまり、子どもの立場にたつて「遊びの形に仕組んだ、導入指導の展開がじゅうぶんになされるであろう。いくつかの事例で、導入指導のあり方についての筆者なりの考えを明らかにしたい。



〔なぞなぞあそび〕

“先生が、歌でなぞなぞを出すわよ、

「しんごう ○○です とまろう しんごう ○○です わたろう」

歌で問題を出し、○○のところを子どもに自由に答えさせ、教師がメロディを付けてまとめる。

“今度はみなさんが 先生に問題を出してね、

教師が、○○のところメロディをつけて答え、少しずつ歌を覚えていこうとするものである。

〔あてっこあそび〕

“えー いらっしゃい いらっしゃい。今日は、先生は元気のいいお魚屋さんよ。今日の先生のお魚さんの店に並んだ品物はね……歌で教えてあげるわね。なん匹出てきたかあてっこよ。”

「わたし さかなやさんで サンマ アジ イワシ プリ タイに マグロ サバに ヒラメ さあさ みんな 買っておくれ」

“さあ、何匹あったかしら？。調べてみましょうね。”

教師は、歌いながら、魚のペープサートを利用して、子どもたちの解答と合わせて、歌に導入していこうとするものである。

〔ごっこあそび〕

“さあ、今日は、まねっこあそびをしましょう。笑いまね、泣きまね、おこりまねをしてみましょうね。最初は、笑いまねよ。先生が、ハンカチを上になげ上げて、ハンカチが床に落ちるあいだ思いきり笑うのよ。ハンカチが床に落ちたら、笑いまねおわり、そしてね、にらめっこするの。じゃ いきますよ。”

充分に表情のくふうができたところで、歌の導入に入る。

「おはよう おはよう 朝がきた なきむしさんが オンオンオン わらいむしさんが ワッハッハッ おこりむしさんが むっむっむっ」

☆「音楽的内容にかかわる指導の問題」への治療

〔発声指導のくふう〕

① 身体表現を伴っての指導をすること。

身体を動かすことにより、のどの緊張を柔らげる。

② 曲想に合わせた言葉がけのくふうをすること。（“元気な声で歌いましょう、は、タブーである。”）

“こいのぼりさんが、風によって気持よさそうに泳いでいます。大風のようにになるとこいのぼりさん 破れちゃうわね、——「こいのぼり」（文部省唱歌）

“赤ちゃんを 起こさないように やさしくねんねさせてあげましょうね。”——「しずかにね」（大谷洋子作詞・飯田秀一作曲）

③ 発声の良い子のそば、または教師の模倣をさせるようにする。

④ 発声指導のための題材を特に選択し、その歌の一部を歌い比べさせる。

“こおろぎさんになって きれいな声でないてみましょう。”——「こおろぎ」（関根栄一作詞・芥川也寸志作曲）

ころころりん ちろちろりんの箇所を、きれいに歌わせるなど。

## ⑤ 日常の教師の話し声にも気を配ること。

“しずかにして!!、……子どもの上をいくような教師のどなり声ということである。

## 〔発音指導のくふう〕

つまずきの要因の中で、教師の発音が不明確で子どもが違った歌詞を覚えてしまったという事例があったが、やはり、発音指導の鍵は、教師の“先生の口を良くみて 歌いましょうね、”の言葉がけにあるようだ。その他のくふうとしては、次のようである。

- ① 教師が口形を小さくしたり、はっきり開いたりして歌い比べ、子どもに評価をさせる。
- ② ことば遊びをとり入れる。

教師が無声で、いろいろな事物の名前を伝え、その口形から、事物の名前をあてていく方法である。子ども同志の遊びに発展させていく。

## 〔強弱のとらえさせ方のくふう〕

この指導は、曲の山の歌い方とも関連し、身体表現により、幼児の段階からとらえさせたい内容である。

- ① 身体表現により、体得させる。

“先生のたいこに合わせて、打つまねをしながら、歌いましょう。強く打つところ、弱く打つところ、じょうずにまねしましょうね。”——「ほんおどり」(三越左千夫作詞・中田喜直作曲)

- ② グループ分けして、交互唱や全体唱により、強弱を感覚的にとらえさせる。

“チューリップ畑の友だちと、すみれ畑の友だちで、仲よく歌ったり、おどったりしましょうね。先生が、蝶々になって飛んでいった所のお友だちが最初に歌いましょうね。みんな一緒に歌う時は、先生もお花になりますよ。さあ 飛んでいきますよ。”——「おはながわらった」(保富康午作詞・湯山 昭作曲)

## 〔フレーズのとらえさせ方のくふう〕(特に、範唱～模唱の際のフレーズの区切りの困難な曲の場合)

「ペンギンちゃん」(まどみちお作詞・中田喜直作曲)

“ペンギンちゃんが お散歩していたら 空からすてきなものが落ちてきたんですって!!、何が落ちてきたのかしら、”

教師が一通り歌ってから、歌詞について話し合い、それから範唱～模唱に入っていく。

はじめは、4小節で区切れる。しかし、後半6小節目からは、アウフタクトの形態であるので、区切り方をうまくしないと、子どもは、たちまちつまずいてしまうであろう。

その対策として、

- ① 両手・頭・身体全体で指揮するように、子どもを誘いこむこと。
- ② 拍の流れにのって、教師がすかさず、アウフタクトの箇所を歌いこむこと。
- ③ 子どもの声にかぶせて、教師も一緒に歌ってあげること。

などがあげられる。

## 〔休符のとらえさせ方のくふう〕

この指導については、好ましく導入できた事例としてあげられた“休符のところに手拍子や身振りを入れたら、すぐまねしてきた。”という例もあるように、休符も単に手拍子のみでなく、歌の雰囲気盛り上げるような身振りのくふうが必要であるようだ。

3つの曲を並べて、その治療としたい。

「まほうのふえ」(飯田秀一作詞・作曲)

おどけて  $\text{♩} = 100$   
 $mf$

1. ままほののふえはすこいそま  
 2. ままほののふえはすこいそま

かごりののころらうかれだすびろ

ローン ロン ビロ ローン ロン (スイ) (ヤッ)

どん はん だん えん へん びん

この曲の場合は、第2フレーズの8分休符を手拍子で、第4フレーズは、その前の“エイッ、”の動作に加えて、8分休符に手拍子をの指導が考えられる。

「しずかにね」(大谷洋子作詞・飯田秀一作曲)

$\text{♩} = 69$   
 $mf$

1. おわい いきかおひるねですよ  
 2. おわい いきかおひるねですよ

シニニシすかね

この曲の第2フレーズの“シーッ、”の前の休符の部分には、手拍子は不向きである。“ほらシーッ、”のように、4分休符の箇所は、赤ちゃんを指さしてから、“シーッ、”で1本指を口に当てて、休符をとらえさせるのがよいであろう。

「仲よしさん」(飯田秀一作詞・作曲)

$\text{♩} = 92$   
 $mf$

1. しんご あかてすまろ  
 2. しんご あかてすまろ

しんご あかてすまろ たろ

おはよば うまかによしん

この曲の場合は、素直に、「おはよう」・「さよなら」のおじぎの動作で、休符をとらえさせるのが自然であろう。

以上のように、曲によって、その曲を最も音楽的に表現できるような身体表現のさせ方のくふうが大切であると思う。

〔身体表現への結び方の問題〕

身体表現をたんなるゼスチャーとしてではなく、より高い次元で、つまり、音楽的諸感覚の体得の手段として、身体表現をとり入れるという基本的な考え方がたいせつであろう。

III-1-ウの身体表現をさせながらの導入方法の結果でも、0～2才児がトップで、5才児では、ほとんど行なわれていないということは、残念なことである。

前述のような〔発声指導のくふう〕でも、〔強弱のとらえさせ方のくふう〕・〔休符のとらえさせ方のくふう〕など、どの指導一つとってみても、身体表現に訴えての指導が、年齢に関係なく行なわれることが望ましい。

#### 〔題材選択の問題〕

この事については、I序説で述べたような観点での教材選択と、子どもの生活（遊び）を充分に知るといふことの努力につきるといえよう。

#### おわりに

子どもの生活は遊び、遊びながら学んでいくと言われる。歌う事も子どもにとっては、遊びの一つである。より教育的な意図のもとに、歌遊びが構成されるなら、音楽的に幸わせに包まれた子どもに育てていくであろう。

本研究では、一応、導入時指導ということに論点をあててきたが、さらに、例えば、発想表現のくふう（その曲を最も美しく表現できる歌い方のくふう）一つをとってみても、歌唱指導全体の指導法のくふうについて、まだまだ、研究の奥深さを感じる。

今後、更に研究を深めていきたいと思う。

#### 〔引用文献〕

- (1) 角尾稔・東洋編著「教育学講座」(4) P.261～P.269 学習研究社 1979年

#### 〔参考文献〕

- 角尾稔・東洋編著「教育学講座」(4) 学習研究社 1979年  
 飯田秀一編著「音楽リズム」 同文書院 1979年  
 教育音楽小学校臨時増刊号「発声指導の研究」 音楽之友社  
 渡辺陸雄「児童の発声のあり方とその指導」 東京都豊島区立目白小学校紀要 1979年  
 飯田秀一・武田道子共著「幼児音楽」 同文書院 1979年